一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザインII

第 21 回 FSP アジア全体報告書

2017.8.27～9.8 in Vietnam & Singapore　【帰国報告会限定】

目次

○ファースト・ステップ・プログラム（FSP）について----------2

○参加メンバー紹介----------3

○研修日程----------5

○研修報告 1：準備授業----------6

○研修報告 2：企業・法人等訪問----------8

・独立行政法人 国際協力機構（JICA)プロジェクト
・特定非営利活動法人 Seed to Table ～ひと・しぜん・くらしつながる～
・日本航空株式会社（JAL）シンガポール支店
・早稲田バイオサイエンスシンガポール研究所
・アジア・大洋州三井物産株式会社 シンガポール支店
・北海道 ASEAN 事務所
・Singapore Bioimaging Consortium

○研修報告 3：協定校・教育機関訪問----------17

・Can Tho University
・Ngee Ann Polytechnic
・National University of Singapore（NUS）
・Yale-NUS College

○研修報告 4：訪問国の文化・歴史学習----------24

○研修報告 5：訪問国調査活動----------25

○研修報告 6：事後授業----------27

○参加者アンケート----------28

○編集後記----------30

ファースト・ステップ・プログラム（FSP）について

ファースト・ステップ・プログラム（通称：FSP）とは、本学の「一般教育演習（フレッシュマンセミナー)」において「グローバル・キャリア・デザイン」として開講している授業科目である。参加者は、海外教育機関での学生交流や国際的に活躍している企業や法人等の現場見学、および海外で勤務されている方々との対話などを短期間で体験できる。ちなみに、留学や語学研修、国際インターンシップを見据えた海外に向けての第一歩という意味をこめてその名がつけられている。

このプログラムは夏季と春季にそれぞれ 2〜3 コースずつ開講され、2017 年度夏季には欧州とアジアの 2 つのプログラムが実施された。すべての課程を修了した学生には、「一般教育演習」の 2 単位が付与される。(北大生のための留学ガイドを参照)

私たちが考える FSP アジアの特徴

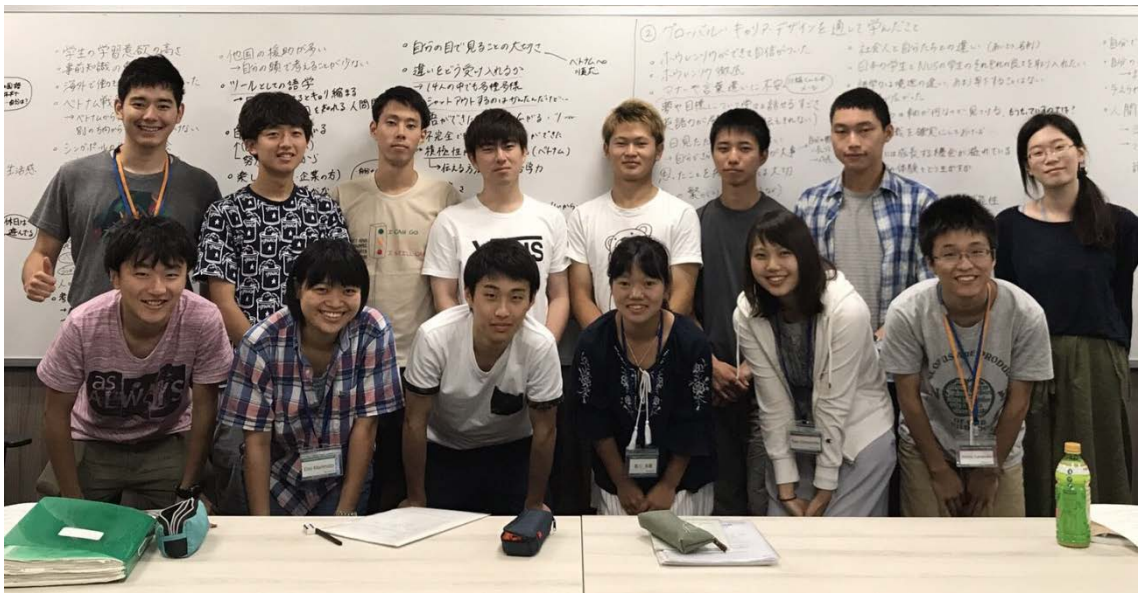
ファースト・ステップ・プログラムの大きな特徴は、研修中は基本的に集団で行動する点だ。学部も学年も出身地もさまざまな集団が 2 週間も行動を共にする機会は他にあまりない。現地での学びを共有したり、ほかのメンバーの考えを聞いて刺激を受けたりできるのは FSP ならではの良さだ。2 週間の研修を通して、個性豊かなメンバーと信頼関係を築くことができる。

一度に多くの経験をできるというのもこのプログラムの魅力である。協定校や教育機関での学生交流では語学力を向上させ、企業・法人等訪問では具体的に自分の将来を思い描くことができる。また訪問国調査活動では自分の興味のある分野を深められた。また、現地研修中だけではなく準備・事後授業でも自身を成長させることができる。13 日間でとても中身の濃い経験ができた。

概要

海外研修期間：2017 年 8 月 27 日（日）〜9 月 8 日（金）
渡　航　先：ベトナム社会主義共和国、シンガポール共和国
参 加 費 用：20 万円程度
【費用に含むもの】　航空運賃、宿泊費、車両借り上げ代、交通費等
奨　学　金：日本学生支援機構（JASSO）奨学金（10 万円）が支給される可能性あり。
（今回は、受給要件を満たす学生は JASSO または本学フロンティア基金新渡戸カレッジ奨学金の受給が可能であった）
参 加 人 数：14 人

参加メンバー紹介



写真上段左から

米田 夏輝	経済学部１年	《記》
◎北村 友	工学部２年	《総》
徳永 遼磨	工学部１年	《総》
村上 純一	経済学部１年	《企》
和田 侑也	医学部１年	《記》
○佐々木 悠貴	工学部２年	《総》
稲見 航一	農学部２年	《プ》
新谷 和佳子	理学部２年	《プ》

下段左から

西川 周佑	経済学部１年	《企》
森本 衣美	工学部２年	《プ》
真船 創太	総合理系１年	《プ》
新川 未緒	医学部２年	《企》
松本 菜緒	経済学部１年	《記》
山中 章弘	農学部２年	《記》

◎はリーダー、○は副リーダーを表す。

引率
国際連携機構　川端千鶴

班の概要

総務企画班　《総》

チーム全体のまとめ、ミーティングの司会進行、協定校・教育機関に配布する名簿の作成、学生交流の企画運営、訪問先への御礼状の作成を担当。

記録広報班　《記》

Facebook などの SNS での情報発信、全体報告書作成、帰国報告会でのプレゼンテーションを担当。

企業訪問班　《企》

訪問企業・法人の事前調査、学習会資料の作成、訪問先への手土産の用意、現地訪問先への先導、訪問先への挨拶、御礼状の作成を担当。

プレゼンテーション班　《プ》

現地の学生に日本や北海道、北海道大学への留学について紹介するプレゼンテーションを担当。

FSP　Facebook・Twitter アカウント

「北海道大学　ファースト・ステップ・プログラム」
https://ja-jp.facebook.com/1ststepprogram/

「北大 2017 夏 FSP@アジア欧州」@fsp_hokudai
https://twitter.com/fsp_hokudai

記録広報班が中心となって運営しているアカウントである。Facebook は代々共用、Twitter は前回のアカウントを引き継ぎ、欧州プログラムと共に使用している。右側にそれぞれのアカウントの QR コードを載せた。どうか参照していただきたい。

研修日程

2017 年度夏季 FSP アジア　行程表

	日付	場所・地域	活動内容	訪問先	頁
1	8/27㈰	新千歳空港 羽田空港	移動		
2	8/28㈪	ホーチミン	企業・法人等訪問	JICA プロジェクト	P8
3	8/29㈫	ベンチェ	企業・法人等訪問	Seed to Table	P10
4	8/30㈬	カントー	水上マーケット訪問・見学 協定校・教育機関訪問	 Can Tho University	P24 P17
5	8/31㈭	ホーチミン	戦争証跡博物館訪問・見学		P24
6	9/1㈮	ホーチミン	振り返りミーティング① 訪問国調査活動		P27 P25
7	9/2㈯	シンガポール	移動 企業・法人等訪問	 日本航空株式会社 シンガポール支店	 P11
8	9/3㈰	シンガポール	訪問国調査活動		
9	9/4㈪	シンガポール	企業・法人等訪問 協定校・教育機関訪問	早稲田バイオサイエンスシンガポール研究所 Ngee Ann Polytechnic	P12 P19
10	9/5㈫	シンガポール	企業・法人等訪問 企業・法人等訪問 企業・法人等訪問	アジア・大洋州 三井物産株式会社 シンガポール支店 北海道 ASEAN 事務所 Singapore Bioimaging Consortium	P13 P15 P16
11	9/6㈬	シンガポール	協定校・教育機関訪問 協定校・教育機関訪問	National University of Singapore（NUS） Yale-NUS College	P20 P22
12	9/7㈭	シンガポール	振り返りミーティング② 訪問国調査活動		P27 P25
13	9/8㈮	シンガポール 成田空港 新千歳空港	移動		

「訪問国調査活動」とは学生のみで計画及び実行する自主研修のことで、「振り返りミーティング」とは各国で学んだことをメンバーで共有する場のことである。

研修報告１：準備授業

準備授業

どんなことに挑戦するためにも念入りな準備が必要である。万全の準備がなければ計画は頓挫してしまうかもしれない。FSP にも海外研修に備えた、それ以外の点でも非常に充実した準備準備が全 5 回にわたって展開される。FSP 欧州、アジアのメンバーが一堂に会し、海外研修に向けた準備をする。その概要をここで紹介する。

第 1 回

FSP 欧州、アジアに参加するメンバーが顔合わせをする最初の授業。多くのメンバーに緊張の様子が見られた。第 1 回目では担当教職員の方々の紹介、プログラムごとに参加者による自己紹介が行われた。また、グローバル・キャリア・デザインという授業の目標、マナーなどの説明を受けた。多くの参加者がＥメールの書き方のマナーに苦労していたように思う。この授業が、ただ海外に行くだけではないということを皆が感じることとなった初回の授業であったと思う。

第 2 回

第 1 回同様に欧州、アジアの 2 プログラム合同の授業であった。英語の学習方法や訪問国に関する知識について学んだ。この授業の成績評価基準に関する説明も行われた。授業の後半では、総務企画班、企業訪問班、プレゼンテーション班、記録広報班の 4 つの班へと班分けが行われた。役割が確定した後、それぞれの班ごとに分かれ教員から担当内容の説明を受けた。

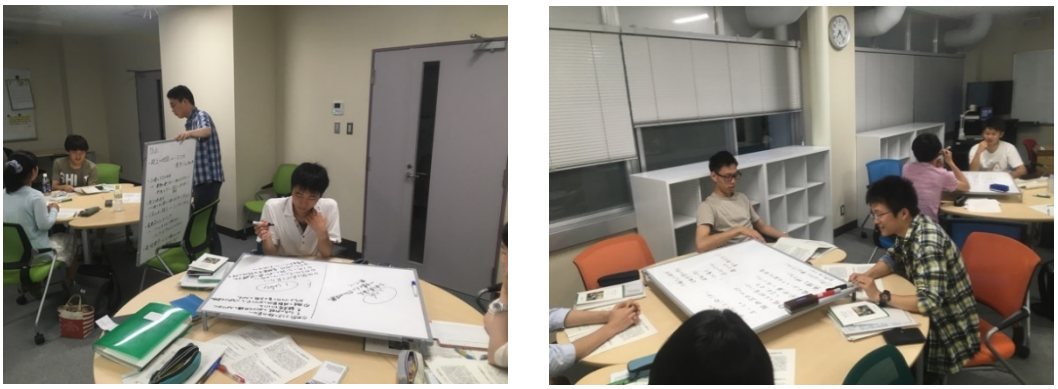
第 3 回

2 プログラム合同授業で、担当教員から異文化理解、異文化コミュニケーションとは何かというレクチャーを受けた。これら 2 つはよく聞く言葉ではあるが、しっかりと理解できていたわけではなかったということを、授業を通じて感じることができた。また、FSP は常に大人数で行動するのでチームについて考えるということも行った。

第 4 回

欧州・アジアプログラムごとの初授業となった。安全管理、危機管理対応という授業テーマのもとでケーススタディなどを行った。体調を崩し企業訪問へ行けなくなった場合、見知らぬ人について行ってしまった場合の 2 つのケースに分かれ、小グループごとにどのように対処すべきかを話し合った。チーム全体でいかなる場合においても、「報告」、「連絡」、「相談」が大切であるということを確認した。

研修報告１：準備授業



（準備授業の様子）

第５回

準備授業最終回。欧州、アジアの２プログラムの合同授業だった。それぞれのプログラムのプレゼンテーション班が作成した訪問国の協定大学等の教育機関で行う、北海道大学を紹介するプレゼンのリハーサルとそれらに対するフィードバックを行った。また、プレゼンの前には「良い聴衆」とは何かということを考えた。それぞれがプレゼンを聴く際に考えたことを実践したように思われる。最後の準備授業ということもあり、研修に必要な資料などが多く配布された。メンバーそれぞれが、いよいよ始まる海外研修に向けて士気を高めていった。

（文責：米田）

研修報告 2：企業・法人等訪問

独立行政法人 国際協力機構（JICA）
高効率燃料電池と再生バイオガスを融合させた地域内エネルギー循環システムの構築プロジェクト　中山隆二様によるご講話

第 21 回 FSP アジアの最初の学びの場となった、JICA のプロジェクト視察。ホーチミン市から車で 2 時間半近く移動し、日本ではあまり見ることができない地平線を眺めることができ、エビなどの養殖用の池が多く見られる場所で高効率燃料電池と再生バイオガスを融合させた地域内エネルギー循環システムの構築プロジェクトは行われていた。今回、我々が訪れた場所はエビの養殖池に隣接する施設であった。この施設には水を濾過する機械など多くの機械、室内には燃料電池を今後置く予定との事であった。

（デモンストレーションサイトで中山様より説明を受ける）

JICA が支援する、九州大学とナノテクノロジー研究所の国際共同研究プロジェクトにおいて、メコンデルタ地域の主要産業である水産業の養殖池の汚泥に着目し、それを使った高効率燃料電池の開発に携わっている。中山様は、地産地消のエネルギー循環システムの構築の支援を行い、エネルギー供給を安定させることを目的に活動をされているそうだ。

（汚泥を実際に見せてもらうメンバーたち）

現在、ベトナムでは急速な経済発展に伴い、エネルギー確保が課題となっている。当プロジェクトの担当者である中山様は、ホーチミン市などの大きな都市でも、電力供給が不安定であるために突然停電が発生することがあるとおっしゃっていた。このプロジェクトの成功がベトナム経済のさらなる発展へと導くことは間違いないと思われる。経済が発展

研修報告 2：企業・法人等訪問

する一方で負の側面として、環境汚染、環境破壊が問題になっている。高度経済成長期の日本では発展に重きを置きすぎたために、公害が発生してしまい多くの被害をもたらした。また中山様によるとベトナムの学校では環境に関する教育があまり行われていないという。このままでは当時の日本と同じ道を歩んでしまうかもしれないと思った。人間が環境を維持しつつ、発展を遂げ続けるのが非常に難しいことはこれまでの歴史が証明している。だがベトナムはこれらの前例から学ぶことが出来る。JICA の支援を皮切りにベトナムの人々の環境に対する関心がさらに高まることを切に願う。

最後に、現地の人々とともに考え、行動する中山様の姿を間近で見て、国際協力という分野に大きな関心を持った。ここでも自分の将来の可能性が大きく広がったと感じられた。経済と環境について詳しく学びたいと考えているメンバーもいて、今後の学習につながる貴重な経験となったと思う。(文責：米田)

(デモンストレーションサイトにて中山様とともに)

研修報告 2：企業・法人等訪問

特定非営利活動法人 Seed to Table ～ひと・しぜん・くらしつながる～ 代表　伊能まゆ様とともに農村訪問

ベトナム 3 日目には農村での貧困改善に取り組む Seed to Table 代表の伊能様に農村の案内をしていただいた。Seed to Table はベトナムにおいて農村の生活・貧困改善にとりくむ NPO 法人である。

まず、訪ねたのはベンチェ省のチョウフン村で、伊能様の事業に参加し、数年で貧困から抜け出し立派な家を持てたご夫婦のお宅である。伊能様から Seed to Table の取り組みであるアヒル・ウシ銀行のご説明を、村の皆様からその体験談をおうかがいした。その後、事業に参加したばかりで軌道に乗り始めた方のお宅を訪ねた。労働力と貧困の関係や一概に貧困問題をまとめることができないことをおうかがいして、メンバー一同問題の複雑さに閉口してしまった。また、バーチー郡へ移動し、有機農業についてのご説明をうかがった後、村の方々と共にベトナムの料理バインセオ作りをさせていただいた。

（有機野菜畑の見学）

伊能様の事業の説明をうかがう中で感じたのは、金銭的な支援ではなく人を育てる支援をしなければならないということだ。人を教育することで、他の村への伝達ができたり自ら考えて判断できるようになるなど、持続的・自発的な事業になることを期待されているそうだ。

最も驚きをもって感じたことは、伊能様と現地の方の親密度であった。我々一行は訪れる先々で想像以上の歓迎・もてなしを受けた。これにはベトナムの方々の気さくさもあるが、一外国人・日本人である伊能様への信頼がないとありえない。伊能様がおっしゃっていたように、この信頼関係から現地の方が何を必要としているのか、どうすれば相手が動いてくれるかを一緒になって考えなければ良い方向に事業は進まないのだと感じた。

また、多くのメンバーが指摘したのは、村の方々の「笑顔」とお別れする際必ず「家族を大切にし、しっかり勉強すること」と言われることだった。日本ではどうだろうと議論になった。我々を最大の笑顔でもてなし、言葉が通じない中で交流してくださるベトナムの方々。家族とは、勉強とは。普段我々が意識せずにいるこれらの言葉の重みが胸にささった。

（文責：山中）

（ごちそうしていただいたベトナム料理）

研修報告 2：企業・法人等訪問

日本航空株式会社（JAL）シンガポール支店
川口純子様によるご講話

ベトナムの建国記念日の９月 2 日、市街地のお祭りの雰囲気が漂う中、我々はシンガポールへと出発した。入国の際、厳重なセキュリティーチェックを受け、大きく華やかなチャンギ空港に入った。そこでお出迎えしてくださったのが日本航空株式会社（JAL）の乗務員マネージャー川口様である。空港の事務所内で、会社や CA のお仕事の説明、ご自身のご来歴についてお話してくださった。

（真剣にご講話を聞くメンバーたち）

日本航空や CA についてのお話は多くが初めて知ることばかりでとても新鮮であった。なかでも、CA は飛行機内でサービス要員・保安要員を担ううえ、ときに看護など様々な役割をこなさなければならず、そのような CA の仕事で必要なことが「コミュニケーション能力」「会話力」「体力」「ストレス対処力」であるというお話が印象に残った。様々な人と関わる仕事ならではの「力」であり、国際的なご来歴と経験が生きたご職業だと感じた。

特に川口様のように外国人を統括・教育する立場では、「例を挙げて説明する」「マイノリティーと感じないようにしてあげる」「直接話す」ことを意識しているとおっしゃっていた。

川口様のお話の中で印象的だった言葉が「諦める理由を探してはいけない」というお言葉だった。川口様はご自身の夢に向かって様々な選択をされる際、どちらがその夢に近づくことができるかという観点で選択し、それに向けねらって努力をされてきたそうだ。

（川口様とともに）

自ら夢や行動を諦める理由をつくっていないか。この言葉は研修中や振り返りミーティングなどでもたびたび話題になり、今までの自分の行動への反省とこれからの行動の指針になった。（文責：山中）

研修報告 2：企業・法人等訪問

早稲田バイオサイエンスシンガポール研究所
新井敏先生によるご講話

シンガポール 3 日目は早稲田バイオサイエンスシンガポール研究所を訪問した。早稲田大学がシンガポールに作った生物系の研究所で、日本人のみならず、様々な国籍の人が研究をしていた。

新井先生は、シンガポールの特徴についてと、研究について御講話してくださった。シンガポールの特徴については、クイズをまじえながら教えていただいた。中でも、シンガポールの就労形態として job hopping をあげられており、日本との違いを感じつつも、これからグローバルで活躍していこうとしている我々にとっては考えさせられるものがあった。また、大学での研究室選びが重要であることを教えていただき、大学を変えることも厭わないほどこだわるべきだともおっしゃっていた。

（新井先生とともに）

また、この研究所はたくさんの研究機関が一堂に会したビルに位置しており、他の研究者との他愛のない会話が研究の進捗につながることもあるとおっしゃっていた。

新井先生の主たる研究である、がんの温熱療法についてもご講話いただいた。温熱療法は副作用が少なく、がんの種類によらないため、患者にとって有効な治療法となるため重視されており、新井先生はその科学的な裏付けをするために日夜研究をしているそうである。

新井先生はご講話の最後に日本の学生と世界の学生の違いについて述べておられた。日本の学生の良いところは集中してものごとに取り組むところ、時間内に終わらせるところであり、逆に劣っているのは英語力とプレゼン力であるそうだ。このように自分たちの長所や短所を客観的に分析することは大切だと感じた。

（ご講話の様子）

御講話を通して、job hopping や大学にこだわらない研究室選びなど、型にとらわれない生き方という新たな視点を得ることができた。（文責：和田）

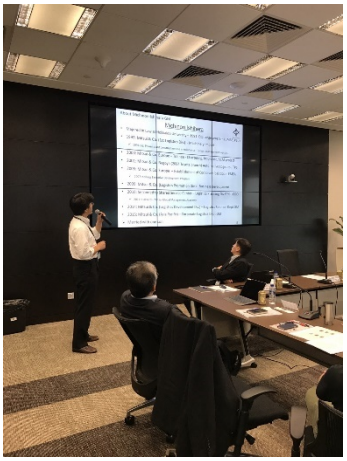
研修報告 2：企業・法人等訪問

アジア・大洋州三井物産株式会社 シンガポール支店
中野真寿様、Rafael Tintin Santamaria 様、松本伸一様、石原道紀様
水野慎介様、中村太郎様のご講話

研修 10 日目。高層ビルの立ち並ぶオフィス街にある三井物産株式会社様を訪問させていただき、中野真寿様、Rafael Tintin Santamaria 様、松本伸一様、石原道紀様、水野慎介様、中村太郎様からご講話をいただいた。広い会議室にはあらゆる壁にスクリーンが備え付けられており、机には発言用にマイクも置かれていた。普段目にすることのない大企業の内部を見て、メンバーたちは皆興奮を隠せない様子だった。お土産として用意してくださった飲み物と三井物産のマーク入り手帳もありがたく頂戴した。

まず、三井物産株式会社の概要についての説明をお聞きした。中でも印象に残ったのが日本のビジネスのあり方についてである。日本を中心とした従来のビジネスではなく、日本が他の国を経済発展へと導くビジネスのほうがこれから先求められるというお話だった。シンガポールという日本から離れた土地で仕事をされているからこそ、そのような客観的な分析ができるのではないかと感じた。

（皆が積極的に質問している様子）



後半はそれぞれの方からご講話をいただいた。どの方もとても生き生きと語られていて、仕事に対する熱い思いが伝わってきた。松本様のご講話では、大規模な事業の裏にある細かな作業についてのお話が印象的だった。総合商社と聞くと大掛かりなものを思い浮かべがちだが、それを支えるのは日々の仕事の積み重ねであるということが感じられた。石原様からは専門分野の勉強が仕事にどのように活きているかを教えていただいた。一見つながりがないように感じられても、学んだことはのちに何かの役に立つ。自分がそのときするべきことに一生懸命取り組むことの大切さを知ることができた。

（石原様のご講話）

また、仕事に関することだけではなく学生時代の過ごし方や留学についてもお聞きすることができた。水野様は卒業前に留学やバックパックをされたそうで、自分が面白いと思うことはとことん突き詰めるのが大事だとおっしゃっていた。中村様は学生時代に専門分野

研修報告 2：企業・法人等訪問

の勉強に没頭されたそうで、ご両親から大金を借りて株を始めたという話もされていた。メンバーたちはお二方の行動力にとても驚いている様子だった。そのほかにも、日々目標をもって生活すること、社会人になってからも努力を続けること、学生時代にしかできないことに積極的に取り組むこと、など人生の先輩としてもたくさんのアドバイスをいただくことができた。特に中野様が最後におっしゃった、「北大で育った強みを生かしてどのように 4 年間を過ごすかが大切」というお言葉はとても心に響いた。普段は同じ大学の人と一緒にいて意識することはなかったが、自分の与えられた環境を存分に生かすことが重要なのだと感じた。また、就職活動のときに最も重視するのは、その人が今までの 22 年間どのように人生を歩んできたかだそうだ。社員の人柄を重視するという三井物産の社風がとても表れていた。

皆様のご講話をお聞きして、ぶれない自分の軸を持ち、常に挑戦し続けながら生きることが大切なのだと強く感じた。自分の普段の生活、そして人生を振り返るきっかけになったと思う。またなにより、ご自身のお仕事に誇りを持ち、今を楽しんで働く 6 名の方々の姿を見て、仕事に情熱を注ぐことの素晴らしさを知ることができた。職業選択という、人生の大部分を左右する行事を目の前に控える私たちにとって、働くことやキャリアを積むことの意義を改めて考える非常に良い機会になったと思う。しかし、重要なのは、この貴重な経験をその場で終わらせず、次のステップへつなげることである。ここで得た気づきや知識をもとに自分の目標に向かって努力できる力が、この先求められるのだと感じた。(文責：松本)

(三井物産株式会社の皆様とともに)

研修報告 2：企業・法人等訪問

北海道 ASEAN 事務所
堀内一宏様、髙橋明史様のご講話　髙橋明史様、野澤広樹様との昼食懇談

シンガポール滞在中に北海道 ASEAN 事務所を訪れた。我々は北海道大学の先輩にあたる髙橋様と昼食を共にしながら様々なお話を伺った。北海道 ASEAN 事務所では、北海道の食の輸出拡大、北海道への観光客誘致、道内への投資促進の 3 つをテーマに、ASEAN 圏内での北海道ブランドを浸透させること、ASEAN 圏内の食、文化や情報などを北海道内に発信することを目的に活動している。

髙橋様とお話をする中で、メンバーの一人から「今後の北海道が発展していくためには何が必要か」という趣旨の質問があった。その問いに対し髙橋様は、私見としながらも、北海道には受け身な部分が垣間見えるとおっしゃっていた。つまり今は北海道というネームバリューで国内外から多くの観光客を獲得することができているが、他の都府県や地域が観光などに力を注いでいる中で、現状維持のままではいずれ北海道は競合に負けてしまうおそれがあるということである。この見解を聞いて大いに納得した。

自らの置かれている現状を甘受するのではなく、さらに良いものを目指していかなければならないということを痛感した。これからの北海道をさらに魅力的にしていくためにも、広報活動を始めとするさらなる地道な努力が大切だと感じた。北海道大学に在籍していることも何かの巡り合わせと捉え、今後の北海道の発展に少しでも貢献したいと思った。（文責：米田）

（北海道 ASEAN 事務所の皆様とともに）

研修報告 2：企業・法人等訪問

Singapore Bioimaging Consortium
杉井重紀先生のご講話

シンガポール 4 日目は Singapore Bioimaging Consortium（シンガポールバイオイメージング研究所）を訪問させていただいた。Singapore Bioimaging Consortium はシンガポール政府がシンガポールの学術振興のために作られた A＊STAR 傘下の研究機関である。杉井様は Fat Metabolism and Stem Cell Group (FMSCG)のグループリーダーを務めていらっしゃる。杉井様から、シンガポールについて、ご自身のご経歴、研究内容について、講義していただいた。また、ご自身の留学経験から我々に御指南をしていただいた。

研究内容については、肥満と糖尿病において、脂肪由来の幹細胞をターゲットとして利用し行う新たな治療方法の確立だった。皮下脂肪を吸引して幹細胞を分離、褐色系脂肪になりやすい処理を施した上で、再び移植し代謝を活発にして病気を治すという、画期的な治療法を研究されていた。専門的で高度な内容だったが、FSP 生は活発に質問をして、理解に努めた。医学を専攻する学生は、御講話の内容を完全に理解するのに必要な知識量に至っていないことを実感し、今後の専門学習により一層力を入れようと決意していた。また、施設内の研究設備を見せていただいた。日本にはない機材が見られた。また研究員のデスクは仕切りがなく開けており、コミュニケーションをしやすいように配慮されていた。また、他の研究分野の研究員とのコミュニケーションから新たな発見があるかもしれないということから、研究分野が同じ人で席を固めないようにするという工夫されているそうで、日本とは異なるシンガポール式の研究所を知ることができた。研究所の中を実際に見ることは普段はないので大変貴重な経験になった。

（研究のご説明を受けるメンバーたち）

最後に、杉井様から大学院、ポスドク時代の留学のお話をいただいた。「日本人にとっては英語が壁になってくるが、きれいな英語を話す必要はなく、ブロークンイングリッシュでいい。大切なのは内容だ。」とおっしゃっていたのが印象的だった。言語の面だけでなく文化の面でも日本と異なるところがたくさんあり苦労したが、環境に適用する能力、サバイバルスキル、国境を越えた多くの才能の持ち主との出会いなど、留学したからこそ得られたことがたくさんあったと話されていた。「留学をしたからこそ今の自分がある」という言葉が印象に残り、留学後にその経験を生かして自分のやりたい研究で活躍されている姿は憧れになったし、留学後にその経験を生かして何をしていくかが重要であると痛感しこれから自分も将来を見据えて目の前のことを頑張っていこうと決意を新たにした。

（文責：和田）

研修報告 3：協定校・教育機関訪問

Can Tho University

ホーチミン市から車で 3 時間半、メコンデルタ地域に位置するカントー市。その都市にある Can Tho University を訪問した。この研修で初となる協定校訪問ということもあり、メンバーの多くは緊張しているように見えた。

今回我々が交流した学生の多くは水産系の学部に在籍していた。はじめに、我々はその学生たちから研究施設の紹介を受けた。水槽や水のろ過システムなどの多くの施設があり、FSP メンバーたちは学生による説明に真剣に聞き入っていた。

一通りの説明を受け終わると、現地学生たちと共に Professor Nguyen Thanh Phuong の授業を受けさせていただいた。現地学生と FSP メンバーで 3 人 1 組の状態で座り受講した。授業の内容はメコンデルタ地域における養殖の重要性というものであった。水産物が経済発展に大きく寄与しているということが、メコンデルタ地域の特徴であるということには驚いた。水産物で GDP を 3 %近くも上げることができたのは本当にすごいと思った。
この授業は専門課程の授業ということもあり、聞き慣れない単語が多く登場したが、現地学生たちがメンバーたちに難解な点を説明してくれたため、授業の大半の内容を理解することができた。教授からはメコンデルタ地域のさらなる発展のためには環境をしっかりと守っていくことが大切ということ、どんなことでも学んでみようというお話をいただいた。

授業終了後、協定校の学生たちが、我々を学生食堂に案内してくれて、昼食時ご同伴してくれた。昼食中もお互いの生活などについて英語でコミュニケーションを取る場面が多く見られた。FSP メンバーたちは自分の意図を伝えることを最優先に頑張っていた。

(Can Tho University による交流企画)

午後からは学生交流の時間だった。お互いに自分の大学のことに関するプレゼンを行い、それぞれの発表に皆が大きな関心を寄せていた。その後様々な交流企画を通してさらなる親睦を深めた。わずか半日であったが、お互いにかなり親睦を深められたと思う。

研修報告 3：協定校・教育機関訪問

Can Tho University の副学長である Dr. Le Viet Dung がかつて北大にかつて留学し博士号を取得されたということもあり、我々は夕食の招待を受けた。大学の来賓用の会場で BBQ、様々なベトナム料理をいただいた。この場でもお互いに交流を大いに楽しんでいた。会の最後に副学長様は北大生を Can Tho University に招くという長年の夢がようやく実現したと喜びの気持ちを我々に伝えてくださった。

（Dr. Le Viet Dung よりお話をいただく）

この日は終日、Can Tho University の学生と交流をした。彼らと交流して思ったことは、ベトナムという国に対して愛着心を持っているということである。彼らが行ったプレゼンもベトナムという国についてが、内容の半分を占め、初めてベトナムを訪れる人でもベトナムがどのような国であるのかということを理解できる内容になっていた。自分の国のことについて誇りを持って語ることができる。このことは非常に大事な姿勢ではないだろうか。日本では、人々の国に対する誇りが薄いように思われる。もっと日本のことを学び、他の国の人々に誇れるような態度を構築していかなければならないと感じた。

第 21 回 FSP アジアでようやく実現した北海道大学と Can Tho University の 2 校間交流。素晴らしい出会い、おもてなしに恵まれたことは本当に感謝するべきであると思う。Can Tho University の副学長様、教職員の皆様、学生の皆様に今一度感謝を申し上げたいと思う。これからも 2 校間の関係が続いていくことを願ってやまない。

（文責：米田）

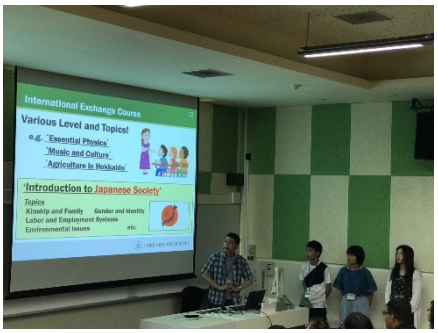
（Can Tho University にて現地の学生とともに）

研修報告 3：協定校・教育機関訪問

Ngee Ann Polytechnic

シンガポール 3 日目には日本の高専にあたる教育機関である、Ngee Ann Polytechnic を訪れた。両国の学生によるプレゼンやクイズ等での交流の後、グループごとにアウティングでシンガポールを探索した。学生は我々と同世代の 20 歳前後の日本語を学ぶ学生だった。

まず私たちが驚かされたことは、彼らの語学力の高さである。日常で使うマレー語や中国語、学校で使う英語はもちろんのこと、多くの学生があと数カ国語を操ることができると言っていた。日本語についても 2 年しか習っていないと言っていたが、日常会話は十分に意思疎通でき、私たちとは日本語と英語を織り交ぜながら会話をした。自らの勉強の足りなさを感じると共に、あくまでも「言語は科目ではなくコミュニケーションのツール」なのだと感じる体験だった。



（北海道大学に関するプレゼン発表）

（フリートークの様子）

また、彼らが日本のことをよく知っていて、同時に深い関心があるのだと気づかされた。クイズとして出題した日本の固有名詞についてすでに知っていて問題にならなかったり、会話の中で日本人である僕たちでもあやふやな知識を知っていたりした。この関心が学びにつながるのだと思い、まただからこそ「ツール」を使って実際に交流できて楽しいのだろうなと感じた。

アウティングの中で私たちが感じたことはシンガポールが多くの民族で構成されているということだった。もちろんこれは地理の時間にもならっているし、よく言う「互いの文化の尊重と認め合い」を頭では分かっているつもりだったが、日本では違いを敬遠しがちであるのだと感じた。実際に同じグループの中で様々な民族・宗教の友達がいる中で食事や探索をし、文化の「違い」を見て、それはただの違いでしかない、タブーでも何でもない違いなのだと感じたからだ。違いとの関わり方がわかった気がする。（文責：山中）

（アウティングではさまざまな場所に連れて行ってもらった）

National University of Singapore（シンガポール国立大学・NUS）

（大学図書館の前で NUS の学生とともに）

シンガポール滞在の 5 日目に National University of Singapore 通称 NUS を訪問した。シンガポールでの研修中は NUS に附設されている NUS high school of Mathematics and Science の寮に宿泊させていただいたため、滞在場所としてもお世話になる大学がどのようなところなのか、皆研修中からとても興味を示していた。

NUS はシンガポール西部に位置する総合大学で、世界大学ランキング(QS ランキング 2016)では 12 位、アジアでは 1 位という超名門校である。

学生交流では、NUS の Japanese Study Society (JSS)の学生と交流した。はじめに、お互いの大学についてのプレゼンを行った。次に、小グループにわかれてフリートークをした。前述の通り NUS は超名門校であるため身構えていた部分はあったが、気さくに話しかけてくれたため交流を深められた。

彼らの多くは日本文化について強く関心を持っており、中でもアニメや漫画といった Cool Japan に関心を持っているように感じた。そのため、文化の話題で盛り上がることができた。

（最後にはお礼にお土産を渡した）

その後は、図書館や生協やカフェテリア、畳のブースなど NUS の構内の施設を案内してもらった。NUS はカフェや屋外など、いたるところに椅子と机があり、実際に勉強している学生がいて学びの環境がとても良いように感じた。

研修報告 3：協定校・教育機関訪問

また、Dr. Lim Beng Choo の授業を受けさせていただいた。能や狂言や歌舞伎や文楽といった伝統舞踊についての lecture だったが、英語による授業で我々には少し難しく感じた。しかし、皆理解に努めていた。日本の伝統舞踊がシンガポールでどのように理解されているのか、それをどのようなかたちで学生に教授されているのかを垣間見ることができた。講義形式は日本と同じであったが、多くの NUS の学生はノートを取るのではなく、パソコンにメモを打ち込んでいる様子が見られた。

(NUS のカフェテリアにて)

NUS という世界のトップクラスの学生の勉強への強い意欲と高い語学力を直に感じ、刺激を受けた。また、至るところに机と椅子がおいてあって、勉強したいと思ったときにできる環境が印象的で、NUS 構内の設備のきれいさや、便利さ以上に、大学全体として学びにたいしてサポートする体制であるという印象を受けた。他校の訪問でもそうであるが、我々の訪問を手厚く歓迎してくれて、様々な活動を準備してくれた NUS の学生に深く感謝するとともに、たった半日程度の訪問ではあったがお互いにたくさんコミュニケーションをとったためにこの先も続くはずである国境をこえたつながりを形成できたのではないかと思う。 これから先自分たちが世界を舞台に活躍しようとしたときにこのような環境で学び、高い意識、高い能力の人たちと一緒に仕事ができるのだと思うとわくわくするとともに、何もせずにいると大学生の間に彼らと大きな差ができてしまうのではと不安になった。だから将来のために大学生のうちに何ができるかを考えながら過ごしていかないとグローバルに活躍するうえで遅れをとってしまうと思った。(文責：和田)

研修報告 3：協定校・教育機関訪問

Yale-NUS College

シンガポール国立大学訪問後、その隣にある Yale-NUS College に向かった。入口では日本人学生数名が出迎えてくれた。その後部屋に案内され、前半はプレゼン発表や学生交流を行い、後半にはキャンパス見学に連れて行ってもらった。

Yale－NUS 側のプレゼンは、日本語の通訳付きで行われた。Yale-NUS College は、2011 年にアメリカのイェール大学とシンガポール国立大学が共同で設立したもので、アジアでリベラルアーツを導入したのはここが初めてだそうだ。リベラルアーツは日本でまだあまり取り入れられていないため、その話を聞くのは新鮮だった。専門分野に関係のない教養科目を勉強するのは大変なこともあるが、それぞれ楽しんで学んでいると話していた。講義はディスカッション形式のものがほとんどらしく、日本の大学との違いを感じた。そのほかにも全寮制の話や 1 日の過ごし方など、相手の大学のことをたくさん知ることができた。

次に、Yale-NUS の学生による弾き語りのパフォーマンスがあった。曲目は映画『君の名は。』の主題歌である『スパークル』と韓国のバラード曲。２曲目をあえて日本の曲にしなかったことについて、彼女は「他の言語にふれることでその国をもっと知りたくなるから、その大切さをみんなに伝えたかった」と話していた。国を知るために言語を学ぶという考え方が一般的だが、逆の見方もあるのである。パフォーマンスは本当に素晴らしく、しばらく拍手が鳴りやまなかった。音楽は世界共通であると改めて感じた。その後は英語で山手線ゲームやしりとりをして、グループごとに盛り上がった。英語を使った交流企画は少し難しかったが、言語を超えてコミュニケーションを図ることができた。

（私たちは尺八の演奏に合わせて『ふるさと』を歌った）

研修報告 3：協定校・教育機関訪問

（キャンパスツアーの様子）

その後、グループに分かれてキャンパスツアーに連れて行ってもらった。敷地が大きくないため、曲がり角を多く作ることで広く見せるという工夫がされているそうだ。キャンパス内には映画館やダンススタジオ、ジムやライブ会場など大学とは思えないほど充実した設備が見られた。ここには、優秀な人材に対して積極的に投資するという国の考えが見受けられる。また、留学生が多いというのもあり、アジアの大学というよりは欧米の大学に近い印象を受けた。校舎内で大きな BGM がかかっていて日本の大学と雰囲気の面でもところどころに違いが見受けられた。

最後は輪になってさまざまなことについて話した。そのときに日本のアニメの話題が出たが、シンガポールの学生は知っていても日本の学生は知らないといった事例が多々あった。日本文化をもっと知る必要があると思うと同時に、日本ではあまり知られていないものが海外で人気なのは興味深いと感じた。帰りも MRT の駅まで送ってくれて、学生たちの優しい人柄に触れることのできた交流会だった。

私たちがこの訪問を通して感じたのは、彼らの学ぶことに対する前向きな姿勢だ。勉強ではなくバイトやサークル活動を優先する日本の学生と比べて、Yale-NUS の学生たちは学生生活を満喫しながらも勉強を心から楽しんでいるように見えた。その姿を見て刺激を受け、専門の勉強に励む原動力につながったと話すメンバーもいた。実際に研修後に行った参加者アンケートでも、印象に残った訪問先として Yale-NUS College という回答は多かった。これを機に自らの学生生活を見直し、より充実したものになるよう勉学やその他の活動に励んでいきたい。（文責：松本）

（Yale-NUS College の学生とともに）

訪問国の文化・歴史学習

研修中は企業・法人等訪問や協定校・教育機関訪問の他にも多くの場所に訪れた。ここでは、主な二つを紹介する。それまでに国のさまざまな面を見たというのもあり、旅行などで行くのとはまた違った角度で物事を感じることができた。

水上マーケット

（船からの風景）

ベトナム 4 日目は早朝から水上マーケットを訪れて見学した。カントーでの宿泊先のホテルからほど近いメコン川支流の港に行き、船に乗り上流の方へ向かった。マーケットに行く途中で、小舟に乗った売人が私たちの船に近づいてきて売りつけを行っていた。売人の船はモーターボートで、オールで漕ぐ小舟を想像していた私たちにとっては少し意外だった。中には大きな船もあり、そのような船の持ち主は家を持たず、その船を住居としているという事を聞いて驚いた。ベトナム政府が正確な数を把握できないほど、このような人々は存在しているらしい。価格としては市内よりも少し安く購買意欲が湧いた。日本ではなかなか見ることのできない果物も多く、皆で分けて食べた。

水上マーケットは水上交通の発展しているメコンデルタ地域の伝統であり、今も残っている貴重な文化であるので実際に目で見ることができて良い経験となった。また、この水上マーケット訪問・見学で感じたことは、人々の生きることへの情熱である。言葉にはできないが、実際に現地の人々の生活を目の当たりにしてこのように感じた。（文責：和田）

戦争証跡博物館

（実際に使われていた軍用機の展示）

研修 5 日目には戦争証跡博物館に見学に行った。ここにはベトナム戦争の際に撮られた写真や実際に使われた軍用機が展示してある。アメリカ軍の残虐な行為、枯葉剤の影響を受けて生まれてきた子供など、衝撃的な写真も数多く。処刑に使われたギロチン台など、そのままの状態で残っているものも見ることができた。

ここにきて多くのメンバーが感じたのが、ベトナム戦争に関する自分たちの知識のなさだ。世界史で習ったとしても、教科書に載っているのは表面上の知識である。国を理解するためには歴史や政治、それらをしっかり学ぶ必要性があると実感した。（文責：松本）

研修報告 5：訪問国調査活動

訪問国調査活動

訪問国調査活動とは、全体で行う研修時間外に自分の興味のあるテーマについて調査する活動である。テーマは観光や建築、食文化や健康問題についてなど多岐にわたった。計画から実行まですべて学生が行うため、自主性や積極性が問われる。行先は皆さまざまだったが、ここではその一部を紹介する。

クチトンネル

研修 6 日目、私たちはクチトンネル見学ツアーに参加した。クチトンネルとは、ベトナム戦争の際に南ベトナム解放民族戦線によって作られたゲリラ戦の本拠地である。戦争中、兵士たちはさまざまな工夫をして狭いトンネル内に身を潜めて生活していた。それは全長 200km におよび、カンボジアとの国境付近まで地下トンネルが張り巡らされていた。

私たちはホーチミン中心部から出ているツアーバスを利用した。バス内ではガイドさんによるベトナムクイズやクチトンネルに関するビデオ上映があり、楽しんで目的地まで向かうことができた。また途中の休憩の際には、ベトナム戦争で体が不自由になった方々が働く伝統工芸品工場の見学も行われた。

バスに揺られること 2 時間半、私たちはクチトンネルに到着した。パンフレットにはエンターテイメント施設という宣伝文句やシューティングゲームの案内などがあり、ベトナム戦争から連想する暗いイメージとの違いにみな驚いていた。大雨の中での見学だったが、当時の病院や食堂のような施設や敵を嵌めるための罠などをじっくりと見て回ることができた。ガイドさんの説明はすべて英語だったため、皆必死についていこうとしていた。

（トンネルの入り口）

途中、長さ 14mのトンネルの中を実際に歩いたが、中腰で歩かなければならないほど狭いうえにとても暗く、当時の地下生活の大変さを身をもって知ることができた。戦争証跡博物館で抱いた「ベトナム戦争についてもっと知りたい」という思いから行ったこの調査。戦時中の人々の生活空間を間近で見て、この歴史は二度と繰り返してはならないと強く感じた。（文責：松本）

ベンタイン市場

私たちが宿泊したホーチミンのホテルから徒歩 20 分の距離にあるベンタイン市場。巨大な建物内の中にたくさんの個人商店がひしめき合い、食品から日用品、衣料品までさまざま

なものを売っている。そのほかに飲食スペースもあり、ベトナム料理やスイーツを楽しむことができる。また夜は建物の外に出店が並び、多くの人でにぎわっている。

（市場で食べたベトナム料理）

この市場で買い物をする際のポイントは、高いと思ったら積極的に値段を下げることだ。特に日本人観光客はいわゆるぼったくりのターゲットにされることが多い。実際に市場には簡単な日本語を話せる店員がたくさんいて、私たちにどんどん話しかけてきた。値段交渉にはお店の人も応じてくれ、コミュニケーションの手段ともなる。普段日本でそのような経験をしない私たちは慣れないながらも進んで値段交渉を行い、買い物を楽しんだ。市場では、より身近にベトナム市民の生活ぶりをうかがうことができた。（文責：松本）

シンガポールの多民族性

（イスラム系の宮殿）

私たちはシンガポールの多民族性について調査した。シンガポールは他民族国家であり、それぞれの民族がリトルインディアやチャイナタウン、ブギスストリート（イスラム）など、地域に分かれて暮らしている。

これらの地域は小さいシンガポール国の中で数駅の距離にある。観光地化している部分もあり、純粋にその民族ばかりが住んでいるとは言えないが、どの街もそれぞれの雰囲気があり、売り物や食事からも宗教や文化の違いを感じることができた。

（リトルインディアにて）

例えば、リトルインディアでは野菜や果物を売っているお店が多く見られた。これはインドの約 40%がベジタリアンであることと関連があると推測できる。

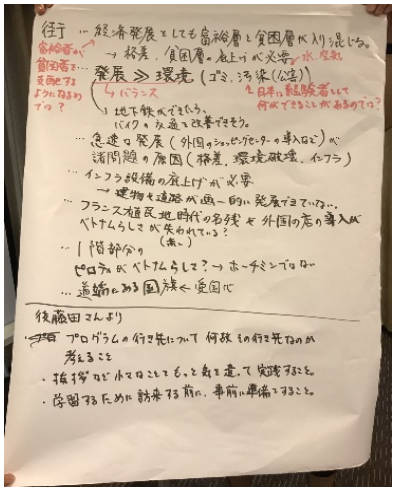
また、チャイナタウンの端にヒンドゥー系の建物があるなど、町の中にも多様性が見られた。

アジア文明博物館では歴史ある中国のお皿や絵画を鑑賞した。シンガポールがアジア諸国の文化の影響を受けてできた国だということを認識させられた。

普段同じ日本人だけと生活している私たちにとって「異文化」に触れる機会はとても良い経験になった。（文責：山中）

事後授業

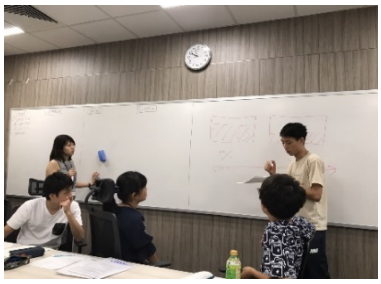
FSP アジアの振り返り授業はシンガポールでの最終日、そして帰国後の 2 回に渡って行われる。各国での振り返りミーティングではそれぞれの気づきや想いを共有し、帰国後の授業ではこれからのセカンドステップへ向けたグローバルキャリアについて考えた。



（振り返りミーティングで出た気づきの数々）

現地での研修では①ベトナム・シンガポールで学んだこと・気づいたこと、②グローバル・キャリア・デザインを通しての 2 点について各人で発表し意見の交流をした。①では各国へのイメージの変化や日本との差異、環境問題や経済問題についての意見が出た。②については、実際に日本企業を訪問してより明確になった将来像や次のステップでは大学生としていま何ができるのか、社会人としてのマナーなど今回のプログラムでの我々の成長を共有した。

帰国後には多くのメンバーが留学生の歓迎イベントに参加するなど、このプログラムで得た仲間と自らのキャリアや日本について考えるなど、研修前はきっとしなかった事に取り組むという変化が見られた。



（第 1 回事後授業の様子）

研修から約 1 ヵ月半後の 10 月 12 日の第 2 回事後授業では、欧州プログラムとの合同で今後のセカンドステップへ向けた授業が行われた。FSP を通して学んだこと、将来のキャリアとして何を目指すか、それを受けて何をするべきかを考え共有した。それぞれの「夢」はもちろん様々ではあったが、専門性を生かして海外にも目を向けたいという意見が多かった。そのための英語力はもちろんのこと、世界に通用する専門的な知識を身につけること、教養や社会などの見聞を広げ文化に触れることなどが必要だと交流した。この意識を維持するために FSP のメンバーとのつながりを続けていきたいとの意見もあった。

このプログラムを通して感じた、

日本・ベトナム・シンガポールの違いと自らの変化、

メンバーや先生と共有した想い・考え方・つながり、

現地で得た熱・アツさをこのまま保つことの必要性。

これからの行動こそが、このプログラムが意味のあったものかを決めるのだと思う。

（文責：山中）

参加者アンケート

今回、FSP 第 21 回アジアに参加した 14 人に対し、海外研修後にアンケートをとった。参加者たちは、このプログラムを通して何を学んだのだろうか。

Q1: このプログラムに参加した目的を教えてください。

「海外研修に行きたかったから」
「様々な経歴を持つ人々(企業の方、学生)と交流し、多面的な視点を得るため」
「自主性、積極性を少しでも向上させるため」
「自分の語学力を試してみたい」

Q2: このプログラムを通して自分が成長したと感じる点を教えてください。

「自分の想いを伝えようとする際に、言葉を変え、時間を掛けて説明すれば伝わり、相手の言うことを理解できるという点」
「状況を読み取る力（いろんな意味で）がついた点」
「報告、連絡、相談などの社会に出てから基本となるスキルがついた点」
「やりたいと思ったことに恐れずに挑戦する精神がついた点」

Q3: このプログラム中の体験(成功・失敗)を教えてください。

「（成功）日本に帰ってきても連絡をすることができる現地の友達を持てたこと」
「(失敗) 日本人の社会人との交流で用いるべき定型文的な言葉遣いを知らなかったために、社会的に正しい挨拶が出来なかったこと」
「(成功) 訪問校の学生とうまく会話できるか不安だったが、英語でなんとか意思疎通がとれたこと」
「(失敗) 海外旅行に不慣れなせいもあって、スーツケースの重量が規定を超えることや、日焼け止めを忘れて困ったこと」
「（失敗）研修の中盤に遅刻など気のたるみがあったこと」
「(成功) 英語の会話にあまり自信がなかったが、実際に話してみると特に支障がなく話せたこと」

Q4: FSP を後輩に薦めるかどうか教えてください。

参加者の 14 名全員が後輩に FSP を勧めたいと回答した。これは FSP が充実したプログ

ラムになっていることの表れであると思う。

Q5: FSP でしか得られない良さはありましたか。

「多種多様な分野の方と交流できること。その日に得られた知識や体験を仲間と共有できること。共有によって経験の価値を高められること」

「短期間の研修とその前後に、個人プレーからチームプレーまで、様々な密度の高い経験ができた」

「企業訪問で企業の方のお話を聞いて質問をしたり、教育機関訪問で現地の学生と直に対話したりした経験は FSP でしか得られないと思う。様々な立場の人々と多く触れ合うことができるのは FSP の大きな特徴だと感じた」

「団体行動なので、旅先で何らかの失敗やアクシデントがあったとしても引率の先生方や他の参加者がそれをフォローできるところ。初めて海外に行く方も安心できると思う」

Q6: FSP への参加を検討している学生にアドバイスをお願いします。

「常に自分の過去、現在、未来を考えましょう。そうすれば疑問はたくさん生まれます。そして遠慮なく質問しましょう。あなただけが得られることもあるかもしれません。それは宝です」

「自分で特に何を学びたいか、はっきりさせて活動に臨むべき。FSP に参加する目的を忘れないようにするべきだと思う」

「人生は一度きりだ。悩んでいるくらいなら、応募しよう！」

「留学や海外になんとなく興味がある学生にとっては、将来について考える良いきっかけになると思う」

「自ら進んで挑戦し、あらゆることに可能性を見つけて欲しい」

「アジアは費用もリーズナブルで、期間も 13 日間と丁度よいので、必要なのはやる気と勇気だけだと思う」

※上記の回答は、記録広報班が行ったアンケートへの FSP 生の回答を、そのまま使用しているが、一部編集の都合上修正している所がある。また、各設問の全ての回答を使用しているわけではない。ご了承いただきたい。

（文責：米田）

編集後記

ここまでお目通しいただきありがとうございます。この報告書が少しでも読んでくださった方のお役に立てば幸いです。最後に、この報告書の制作に携わった 4 人のメンバーから一言ずつ述べさせていただきます。

ほとんど万全な準備をせずに迎えた研修 1 日目。この状態で何が得られるのだろうと不安に思った気持ちはすぐに消え、本当に多くのことを学び吸収することができました。一緒に行ったメンバー、川端さん、企業の方々、現地の学生など 2 週間でたくさんの人と関わり、自分の人生の見方が大きく変わりました。そこで得た貴重な経験を報告書という形にまとめあげることができてよかったです。最後までありがとうございました。（松本 菜緒）

僕がこのプログラムに参加すると決めたのは、「ファースト・ステップのため」ではなく単に「手軽に」海外に行けるからでした。しかし、研修中にはこの報告書にまとめた通り、いや言葉にはできないそれ以上の発見・収穫がありました。この報告書が未来の FSP 生の背中を押すものになれば幸いです。ありがとうございました。（山中 章弘）

報告書を最後まで読んでくださり、ありがとうございました。私たちが研修で得た全てを、この報告書で皆さんにお伝えすることは難しいかもしれません。このように思うほど、FSP は毎日の活動に多くの学びがありました。また大学生という時期に、海外で働く先輩方や海外で学ぶ学生たちと交流を持てた経験は、自分にとって大きな宝になると確信しています。この報告書を読んで少しでも FSP という活動に、さらには海外に少しでも興味を持っていただければ幸いです。これからも FSP をよろしくお願いします。（米田 夏輝）

研修中は毎日必死だったもので、何が得られたか、何が変わったのかが漠然としていました。事後授業と報告書の作成で明らかになったと思います。この研修の様々な経験と出会いで自分の人生は変わったと思います。ご精読ありがとうございました。（和田 侑也）

謝辞

私たちがこのようにたくさんの学びを得られたのは、訪問させていただいた企業・法人の皆様、協定校・教育機関の皆様、引率ならびにご指導くださいました国際連携機構の川端千鶴さん、石倉香理さん、科目担当教員の肖蘭先生、現地コーディネーターの後藤田明子さんなど、多くの方々のご協力やサポートがあってこそです。心から感謝申し上げます。

最後に、2 週間をともに過ごした仲間がいなければ、こんなにも充実した研修を送ることはできませんでした。この素晴らしい出会いに感謝します。本当にありがとうございました。

2017 年 10 月 31 日

第 21 回 FSP アジア　記録広報班一同

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザインII

第２１回ファースト・ステップ・プログラム（FSP）アジア　全体報告書

【帰国報告会限定版】

平成２９年１０月３１日

編集：第２１回 FSP アジア　記録広報班（松本、山中、米田、和田）

問合わせ先：北海道大学　国際連携機構　国際オフィサー室（国際交流課）

電話：（011）706-8040/8032

Email： ambitious@oia.hokudai.ac.jp

Facebook：http://www.facebook.com/1ststepprogram

Twitter：https://twitter.com/fsp_hokudai